

# 神殿

「こうして、ソロモンが【主】の宮のためにしたすべての工事が完成した。そこで、ソロモンは父ダビデが聖別した物、すなわち、銀、金、各種の器具類を運び入れ、神の宮の宝物倉に納めた。」(歴代誌第二5:1)

## 神殿の歴史

(1) 神殿が建てられる前にイスラエルには幕屋があった。幕屋はイスラエル人が荒野の中のシナイ山にいたときに神が建てるように指示されたテントである(出25:-27:; 30:; 36:-38:; 39:32-40:33, →「幕屋」の図 p.174, 「幕屋の備品」の図 p.174)。イスラエル人は出エジプトの奇蹟によって何百年ものエジプトでの奴隷生活から完全に解放された。そのあと荒野での生活をした。そして約束の地であるカナンに入ってからこの運搬できる聖所をソロモン王の時代まで維持していた。ソロモンはその治世の初期に何万人もの人に神の宮の建設に加わるように命令した(→1列5:13-18)。治世の第四年目に基礎が置かれ、7年後に神殿は完成した(1列6:37-38, →「ソロモンの神殿」の図 p.557, 「神殿の備品」の図 p.557)。こうして礼拝をし、神へのいけにえをささげる常設の場所がエルサレムにできた。事実、神殿ができることによってエルサレムは全イスラエルの礼拝の中心地になった(→「エルサレムの町」の項 p.674)。

(2) 王朝時代には、神殿は冒瀆(腐敗、侮辱、荒廃)と回復を何回も繰返し体験した。神殿はレハブアム王の治世のときにエジプトのシシャクによって襲撃された(Ⅱ歴12:9)。けれども、その後アサ王によって修築された(Ⅱ歴15:8, 18)。さらに霊的反抗と衰退の後にヨアシュ王が再び神殿を修築した(Ⅱ歴24:4-14)。後にアハズ王は政策の一部として神殿の備品をいくつか取ってアッシリヤ王に送り、その後神殿の戸を閉めてしまった(Ⅱ歴28:21, 24)。その息子のヒゼキヤは再び神殿を開いて修築をし、具体的にも霊的にもきよめたけれども(Ⅱ歴29:1-19)、息子のマナセによって再び汚され、使えなくされてしまった(Ⅱ歴33:1-7)。最後に神殿を修復したのはマナセの孫のヨシヤ王だった(Ⅱ歴34:1, 8-13)。そのあとユダの王たちは主に逆らって偶像の神々を礼拝し続けたので、ついに神はバビロンのネブカデネザル王が前586年に神殿を完全に破壊することを許された(Ⅱ列25:13-17, Ⅱ歴36:18-19)。この破壊の前後にバビロニア人はユダヤ人を帝国の各地方に追放(捕虜にして流刑にする)してしまった(→エズ緒論, Ⅱ列24:1注「捕囚の経過」→「ユダ(南王国)の捕囚」の地図 p.633)。

(3) 50年後にペルシヤのクロス王(バビロニア人を支配した)は、ユダヤ人がバビロンから母国へ戻って神殿を再建することを許可した(エズ1:1-4, →「捕囚からの帰還」の地図 p.759)。再建の努力を指導したのはゼルバベルだった(エズ3:8)けれども、その土地に住む人々からの反対に遭い非常に苦しめられた(エズ4:1-4)。10年前後遅れたあとで、人々は計画を再開することを許されて(エズ4:24-5:2)、神殿は前516年に完成して奉獻された(エズ6:14-18)。新約聖書の時代の最初の頃、ヘロデ王は多くの時間と経費を使ってこの第二神殿を修復し美しくした(ヨハ2:20)。これは主イエスが訪ね、うまく利用している商人や両替人たちを2度にわたって追出した神殿である。彼らの強欲によって神殿は人々の祈りと礼拝のために使えなくなっていた(→マタ21:12-13, ヨハ2:13-21)。けれどもユダヤ人がローマの政府に繰返し反乱した結果、紀元70年に神殿はエルサレムの町全体とともに再び破壊されて礼拝は不可能になってしまった。

**イスラエル人にとっての神殿の意味** 神殿はイスラエル人にとってエルサレムの町と同じように多くの重要な意味を持つものだった(→「エルサレムの町」の項 p.674)。

(1) 神殿はイスラエル人の間に神の臨在と守りがあることを象徴していた(⇒出25:8, 29:43-46)。神殿がささげられたとき「火が天から下って来て、全焼のいけにえと、数々のいけにえとを焼き尽くした。そじ

て、主の栄光がこの宮に満ちた」(Ⅱ歴7:1-2, ⇒出40:34-38)。実際に神の臨在があまりにも満ちていたので、祭司たちは入って奉仕することができなかった。永遠の報酬として神はご自分の名前をそこに置くと約束された(Ⅱ歴6:20, 33)。それは神殿が正しく用いられる限り、神が神殿と一つになってご自分の特性と臨在を表すということである。こういうわけで聖書はたびたび神の民が宮に向かって祈り(Ⅱ歴6:24, 26, 29, 32)、神が「その宮で」祈りを聞かれる(詩18:6)と説明しているのである。

(2) 神殿はまたご自分の民に対する神の贖い(罪の最終的結果から救い、解放し、神との関係を回復すること)を象徴していた。神殿には二つの重要な機能がかった。それは毎日青銅の祭壇の上で罪のためのいけにえをささげることと、毎年贖罪の日を守ることだった(→「贖罪の日」の項 p.223)。贖罪の日は1年に1度のことで、大祭司が至聖所に入って契約の箱のふたに血を注ぐのである。これは人々の罪を償う(おおう、弁償する)ことだった(⇒レビ16:1, 1列8:6-9)。このような神殿の儀式を通してイスラエル人は罪、赦し、神との関係修復に対する代価が高いことを教えられた。

(3) 神の民の歴史を通して神が住まわれる場所、神殿は必ず一つしかなかった。このことは神がただ一人、全能の主、イスラエルの契約の神であることを例証していた(→「イスラエル人との神の契約」の項 p.351)。

(4) けれども神殿が神の臨在を絶対的に保証していたのではなかった。それは人々がほかの神々を拒んで、神の律法と教えに従うときに限って神の臨在を象徴するものだった。たとえば預言者ミカは、乱暴で物質的なのに自分たちの中に神の臨在を象徴するものがある限りは災難を逃れることができると考えている指導者たちを批判した(ミカ3:9-11)。そして神はエルサレムと神殿を破壊することによって、教訓を与えるだろうと預言した。エレミヤは後に、ユダの反抗している人々が「これは主の宮、主の宮、主の宮だ」と絶えずぞんざいに言っているのを非難している(エレ7:2-4, 8-12)。なぜなら主の宮は人々にとって何の意味も持っていなかったからである。人々はこのことをただ気休めに繰返していたのである。人々が神を敬わない生活をしていたため、神はご臨在の象徴である神殿を破壊される(エレ7:14-15)。そして祈りを聞くつもりはないからユダのために祈るのは無駄であるとエレミヤに言われた(エレ7:16)。残された唯一の希望は人々がその生き方を変えて神の道に従うように戻ることだった(エレ7:5-7)。

**キリスト教会にとっての神殿の意味**

新約聖書での神殿の役割は、旧約聖書で神殿が象徴していることとの関係で理解しなければならない。

(1) 主イエスは旧約聖書の預言者と同じように神殿の乱用を批判された。最初(ヨハ2:13-17)と最後(マタ21:12-13)の公の行動で主イエスは、霊的目的をよこしまな行動で隠してしまっている人々を強引に追出してしまった(→ルカ19:45注)。そしてさらに神殿が完全に破壊される日が来ることを予告された(マタ24:1-2, マコ13:1-2, ルカ21:5-6)。

(2) エルサレムの最初の教会の信仰者たちは祈りの時間にしばしば神殿に行った(使2:46, 3:1, 5:21, 42)。それは習慣として行ったことだった。けれども、信仰者が祈れる場所はそこだけではないことはわかっていた(→使4:23-31)。ステパノ(教会の指導者の一人でキリストを信じる信仰のために最初に殺され殉教した人)とパウロ(新約聖書の多くの書物を書いた人)は、生きておられる神は人間の手で造った神殿に閉じ込め(壁で囲み込む、一定の場所に限定する)られないことをあかしした(使7:48-50, 17:24)。

(3) キリスト者の礼拝の焦点は神殿からイエス・キリストご自身に移った。今では神殿ではなく、イエス・キリストが神の民の中にある神の臨在を表している。実際に主イエスは単に象徴ではなく、インマヌエル(「神は私たちとともにおられる」)として地上に来られたのである(マタ1:23)。この方は人間のかたちをした神のことばであり(ヨハ1:14)、その中に神の満ち満ちた特性が宿っている(コロ2:9)。事実主イエスはご自分のことを神殿であると言われた(ヨハ2:19-22)。そして十字架の上で死ぬことによって、神殿でささげられたどのいけにえもできなかった最高の目的を完成された。いけにえは人々の罪からのきよめを主イエスのようにただ一度で行うことはなかった(⇒ヘブ9:1-10:8)。サマリヤの女との会話の中で主イエスは真実の礼拝は建物の中で行うことではなく、「霊とまことによって」行われるものになると言われた。それ

